

ニューヨークタイムス、2005年 9月16日（金曜日）

美術論評 「描きたい、描かずにいられない」 ホーランドコッテル記

オブセシブ ドローイング American Folk Art Museum

1946年生まれの日本人のアーティストである土井宏之の抽象的なドローイングもまた、我を忘れてしまいそうな集中した状態のなかで製作されたものです。しかし方法としては、自由な形をとっており、量的に多いものがあります。それぞれのデザインは、数え切れない程の小さな、とても微小な丸（サークル）が黒いインクで密集して描かれており、そしてたくさんの丸が集まって郡れをなし、そしてそれらがさらに集まってより大きな形を作っています。例えば、山脈や、銀河系の星雲や、人間の細胞の魂のようにも見えます。

土井氏のドローイングは、丸を多量に細かく描いている一連の作家、クサマヤヨイヤタナカアツコの芸術を思い起こさせます。これに、彼は個人的な特別な動機を加えています。美術館の展示会場に掲げられた土井氏に関する説明文によりますと、彼は自分の作品をこの宇宙での自分のなすべき仕事、そして喜び、と言っています。だから、描き続けなければならないと。